



【小学校中学年の部】

読んだ本…ハッピーバースデー
著者…青木 和雄

わたしとあすか

小平小学校3年 山口 優依さん



「なんで、たん生
日なんてあるんだ
ろう。」

と、わたしは、
ずっとふしぎに
思っていました。

そして、わたしが小学三年生の時、この「ハッピーバースデー」という本を見つけてきました。楽しいお話のかな、と思つて読んでみましたが、すこしびっくりする内容でした。

主人公のあすかがお母さんのしず代にいじめられ、声が出なくなつてしまします。だけど、そのいじめをのりこえ、大切な十二さいのたん生日をいわつてもらえた、あすかの一年間のど力のお話です。

わたしがこの本を読んで、いんしょうにのこつたところが二つあります。

まず一つ目は、あすかがいじめられていたけど、強い気持ちでつらい思いをのりこえたところです。なぜなら、もしわたしがあすかのように、お母さんから「生まなきゃよかった。」なんて言われたら、かなしくてただただだつたと思ふからです。でも、あすかは自分でかいつつしようとかんばつていたので、「すごいなあ、わたしにはできないなあ。」と思ひました。

二つ目は、あすかが十一さいではたん

【小学校高学年の部】

読んだ本…十五少年漂流記
著者…ジュール・ベルヌ

仲間は大車

小平小学校5年 山川 千里さん



（この物語は争い
ごとがあり、ハラ
ハラするな。）

この「十五少年
漂流記」という本
を読み終わつた時

の第一印象です。作者ベルヌさんのこの物語は、十五人の少年が漂流し、ある島にたどり着きます。そこで待ち受けている困難をみんなで乗り越えていくお話です。この本で、ベルヌさんが伝えたいことはどんなことなのか気になり、読もうと思ひました。

まず、少年たちが二年間もの間、狩りをしながら生き残つたのは、「みんなで協力し合い、かんばつてきたから」だと伝えたかつたのだと思ひました。なぜかという、一人だともできないので、生き残れなかつたかもしれないからです。もし、ぼくがこの島に漂流していたら、仲間がいなくて心細くなり、（もう日本には帰れないかもしれない）と、希望を持つこともできず、全てをあきらめてしまふと思ひます。ともに協力し合う仲間が必要で大切なのだと感じました。

次に、物語の途中で、十五人の少年がはなれて暮らすという場面があります。この後に仲間の一人がジャガーというヒョウに似たもうじゅうにおそわれてしまひます。その時、仲間がナイフ一本でもうじゅうに立ち向かい、自分の危険を

【中学校の部】

読んだ本…夏の庭
著者…湯本香樹実

人との交流で得られるもの

ひらた清風中学校2年 阿部 港さん



死んでしまった人は、どうなつてしまふのだろう。今私たちがいるこの世界とは違つた死後の世界へ行くのだろうか。それとも、霊体となつて、私たちのいるこの世界を漂ひ続けるのだろうか。そのどちらでもなく、死んだ先はただの闇なのかもしれない。私は「夏の庭」を読んで、「死」ということを考えさせられた。

「夏の庭」は、三人の少年と一人の老人の物語だ。ある日、クラスメイトの山下から祖母のお葬式の様子について聞いた木山と河辺は、山下とともに死とは何かを考え始める。河辺の提案で人が死ぬ瞬間を見ることになった三人は、町外れに暮らす生きた屍のような一人の老人を「観察」しようとする。外から家の中を覗いたり、買い物に行く老人を尾行したりと、はじめは老人から隠れるように観察を続ける三人だったが、いつの間にか老人と交流するようになっていく。不思議なことに、少年たちと交流を深めるほどに老人は元気になっていくように見える。自分で料理を作つたり、家のペンキを塗り直したり、庭一面にコスモスを植えたりと、老人とともに過ごす少年たちもたくさん経験をする。ある日、サッカーの合宿から帰つてきた少年たちが老人の家に行くと、老人は死んでた。「死」への好奇心から始まつた老人と少年たちとの付き合いは「死」という形で終わつてしまつたのである。「これはおじいさんじゃない」「見たくない」と悲しむ少年たちだったが、やがてその「死」を受け入れる。今まで老人に会えることは当たり前だつたが、それは奇跡であつたのだと、別れてから気付いたのだ。少年たちはその後、老人との思ひ出を胸に、卒業してそれぞれの道を歩んでいく。

私は、山下が観察を始める前に言つていた「死んだ人、見たことあるか」という言葉が一番印象深かつた。それは、私も少年たちと同様に死んでしまつた人を見たことがなかつたからだ。この本に出会う少し前に、近所に住んでいた知り合いが亡くなつてしまつた。昔から親切に接してもらつていたというの



生日をいわってもらえなかったけれど、十二さいでは家族で、大切なたん生日をいわってもらえたところです。わたしは、たん生日を毎年いわってもらえます。しかし、あすかは十一さいの時に、たん生日をいわってもらえませんでした。理由は、お母さんにたん生日のことをわすれられていたからです。わたしは、そんなわたしがこの、「ハッピーバースデー」の本を読んで新しく知ったことが二つあります。まずは、もしたん生日はなかったら人は生まれてこないし、せい長しないことです。

十一さいの時に、たん生をいわってもらえなかったあすかがどんな気持ちをしているかを考えると、とてもかなしくなります。これからは、たん生日をいわってもらえることをあたりまえと思わずに、家族に感じたいと思います。

もう一つは、兄妹のふかいつながりです。はじめは、兄の直人もあすかにひどいことを言っていました。あすかの声が出なくなっていました。あすかの助けようとしてくれました。わたしには姉が一人いますが毎日けんかばかりしています。だけど、本当は姉のことが大好きです。これからもけんかをするかもしれないけど、お互い助け合っていると思います。

この本のおかげで、家族の大切さや、たん生日は本当にとくべつな日なんだなということを知ることができました。今のわたしは、あすかのようには強い気持ちをもっているかは分かりませんが、どんなに大へんなことがあっても、あきらめずに立ち向かっていきたいです。そしてわたしの周りの人にも、ゆう気をあげられるような人になりたいと思います。

かえりみずに助けてくれました。いつも一緒にいるだけでなく、命の危険がせまってもこのように助けてくれる仲間、本当の意味で仲間だし、大切に思っているのだとぼくは思いました。この場面でベルヌさんは、「本当の仲間の大切さ」を伝えたかったのだと思います。

物語の最後に、少年十五人と悪人七人の争いがあります。ここでも、仲間と協力し合って悪人に立ち向かっています。ベルヌさんは、「この場面で「戦争や争いはやめた方がいい」ということを伝えたかったのだと思います。ぼくがそう思ったのは、戦争や争いごとをするよりも、物語の中の少年たちのように、他国の人と仲良くし、協力し合った方が平和的でよいと思ったからです。争うのではなく、仲間と協力し合うことでどんな困難も乗り越えることができ、命に関わるピンチもさけられるということに気づいてほしいのだと思います。

この本を読んで、ぼくは仲間について考えました。授業中にわからない所を教えてくれたり、ぼくの説明を一生けん命に聞いてくれたりする仲間がいます。当たり前のように思っていました。が、今考えると、とてもうれしいです。また、ぼくは、争いや差別のない平和な世界になつてほしいと思います。人がぎせいになつてまで決めることが本当にあるのでしょうか。そのようなことよりも、遊んだり活動したりすることで心のきずなを深め、協力してチーム力を高めていく方がよいと思います。

これからの学校生活の中で、ぼくの中で乗りこえなければならぬ困難があると思います。そんな時は、仲間を信じて協力したり助け合ったりして乗りこえたいと思います。

に、何もできなかったことへの後悔や、あまりにも急な出来事であったための喪失感で、私の頭はいっぱいになった。このときの私は「死」というものから目を背けたいと思っていたのだ。少年たちと出会う前の老人も同じような感情を抱いていたのではないだろうか。

老人は若い頃、戦争でお腹に子供のいる女性を殺してしまつたことがある。それ以来、家にも帰らず、生きる希望を失ってしまったかのように、ずっと一人で暮らしていたのだ。誰とも接することなく、「死」に向き合いたくなかつたのかもしれない。そんななか老人にはともだちができた。三人の少年たちである。少しずつ心を開いていき、いろいろな知識を少年たちに教えている老人の様子は、言葉や態度とは裏腹に嬉しそうに見えた。また、少年たちが老人を彼の奥さんに会わせてあげようと奮闘する姿からは、老人を思う少年たちの成長が感じられ、心が温まるようだった。だが、老人との日々は終わりを迎える。あまりに突然で、あまりに残酷な「別れ」だった。

しかし、少年たちは悲しみに暮れるだけではなく。彼らは、それぞれが抱える家庭での問題を乗り越えていく。今までは狭い視野でしか見られなかった物事を、老人とともにさまざまな経験を通じて、客観的に見たり、考えたりするようになった。

「経験」や「他者への思いやり」が彼らを大きく成長させたのだと思う。

この本を読む前に私が抱いていた「死」に対する疑問は、山下が言った、「だってオレたち、あの世に知り合いがいるんだ。それってすごい心強くないか!」という言葉で解決したように思えた。老人は死んでしまったが、老人との思い出や知識は、確かに少年たちの心に「在る」のだ。人は死んでも誰かの心の中で生き続ける、という話を聞いたことがあるが、あながち間違つてはいないのかもしれない。

最近インターネットなどによってたくさんの情報を得られるようになったせい、人と人との交流が少なくなつてきている。しかし、人との交流でしか得られないものも確かにあるはずだ。特に、私たちの何倍もの知識と経験をもっている大人や老人から得られるものは大きいだろう。この少年たちと老人のような、他者との直接的なコミュニケーションこそが、現代の私たちに必要とされていることなのではないだろうか。あたりまえともされてきたことができるのなら、さまざまな視点で物事を捉えて、新しい発見をすることができるとは思えないだろうか。一歩引いて生きるのではなく、面倒がらず積極的に他者に関わることで、私も大きく成長したいと願う。「死」が全ての終わりでないのだから…。